

『鐘の音』におけるリアリズムとファンタジー

木原泰紀

(2001年8月31日 受付)

1844年に刊行されたディケンズ (Charles Dickens) の『鐘の音』 (*The Chimes*) は、後に『クリスマス・ブックス』 (*The Christmas Books*) という表題のもとに纏められたクリスマス物語集の二番目の作品である。『クリスマス・キャロル』 (*A Christmas Carol*, 1843) に始まるこれらのクリスマス物語には、所謂「飢餓の40年代」 (“Hungry Forties”) という時代背景が大きく関わっている。1840年代のイギリスは、農作物の大不作に見舞われ、貧富の格差が著しく広がり、国民が二つに分裂する状況さえ生まれつつあった。そのなかでディケンズは、1843年に児童雇用に関する調査委員会の報告書に触発され、その年のクリスマスに貧困階級の子ども擁護を訴えるパンフレットを発行することを構想したが、結局、それが形を変え、『クリスマス・キャロル』という物語に結実したのである。このような創作に関わる誘因が『クリスマス・キャロル』だけでなく、その後続いたクリスマス物語の性格をも決定したと言えるだろう。つまり、これらの作品群においては、多かれ少なかれ、貧困に喘ぐ労働者階級の悲惨な現状と、それを見て見ぬ振りをする権力者、有産階級の政策的、かつ道義的怠慢への批判という社会小説としての役割が組み込まれているのである。とりわけ『鐘の音』には、労働者階級に関わる社会問題に強く焦点が当てられている。例えば、マリリン・クラタ (Marilyn J. Kurata) は『クリスマス・キャロル』との比較のなかで、次のように述べている。

To a modern audience conditioned by annual school productions of *A Christmas Carol*, certain aspects of *The Chimes*—the supernatural element, the humanitarian appeal, and the glorification of family love—are expected, but the sharp social criticism differs considerably from *A Christmas Carol*'s stereotypical appeal to man's common humanity, and Meg's movement toward infanticide, although truly Dickensian in its harrowing details, is unexpected in a Christmas story. (20)

この痛烈な社会批判、そして深刻な貧民の惨状が描かれている『鐘の音』という作品は、確かにクリスマス向けの物語に似つかわしくないようにみえるかもしれない。しかし、ほとんどのクリスマス物語に共通するもう一つの特徴によって、この苛酷な現状の様相が言わば中和されていると考えられるのである。

その特徴とは、超自然的な要素、ファンタジーの仕掛けによって物語が構造化されているという点である。『クリスマス・キャロル』（副題は”Being a Ghost Story of Christmas”）においては、三人の幽霊が吝嗇漢スクルージ (Scrooge) を教化し、改心させる役割を担っている。同様に、『鐘の音』（副題が”a goblin story of some bells that rang an old year and a new year in”）においても、主人公トビー・ヴェック (Toby Veck) への教育と彼の改心が鐘の精によって成し遂げられているように、やはりファンタジーの装置がこの物語の中心テーマの枠組を形成しているのである。しかし、このリアリズムとファンタジーの奇妙な接合は、厳しい現実の中和を目的とするだけではなく、ディケンズの創作上の重要な基本的技法に由来するとも考えられる。それは、まず彼の処女長編小説『ピクウィック・クラブ遺文録』（*The Pickwick Papers*, 1836-7）のなかに見ることができる。この作品中の挿話の語り手、ジャック・バムバ (Jack Bamber) の、”there’s romance enough at home without going half for a mile for it” (361) という言葉が、”the romance of real life” (58) という日常と非日常の止揚された関係を開示する。後に、『家庭の言葉』（*Household Words*）創刊号 (27 Mar. 1850) の巻頭言 (1)、そして『荒涼館』（*Bleak House*, 1851-53) の序文 (xiv) においても同様の言及がなされていることから分かるように、この現実をロマンスの光が彩るその様相は、ディケンズ独自のリアリズム観を示していると考えられる。しかしながら、クリスマス物語に見られるリアリズムとファンタジーの接合は、この”the romance of real life”という創作技法の変奏的様態であるだけでなく、もう一つの重要な両者の関係性を孕んでいるように思われる。本論では、『鐘の音』に見られるリアリズムとファンタジーの各要素の分析、そして両者の新たな関係を考察していく。

『鐘の音』と『クリスマス・キャロル』は、極めて類似した物語構造を内包しているにもかかわらず、前述したクラタの評言にあるように、前者のより強い社会問題への意識という点において、差異が認められる。この差異を生み出した原因の一つとして、しばしばトーマス・カーライル (Thomas Carlyle) の影響が指摘されている。例えば、マイケル・スレイタ (Michael Slater) は次のように述べている。

The Chimes...is indeed written so much in the spirit and occasionally even in the very idiom of Carlyle’s social writings.... Although this influence had already manifested itself in Dickens’s work, nothing written previous to The Chimes had been conceived and

executed in such a thoroughgoing spirit of discipleship. (506)

ゴールドバーグ (Michael Goldberg) も、この二人は出会いのときから常に”disciple and master”の関係にあったと述べているが (1)、『鐘の音』はカーライルの社会理論を十全に体現した最初の作品と言えるかもしれない。その一例が、『鐘の音』における社会問題の根幹をなすテーマ、”the widening gulf between the rich and the poor” (Slater, 507) であろう。この富める者と貧しき者の乖離という問題は、スレイタによれば、カーライルの言及に呼応して (507-8)、『鐘の音』の登場人物、ウィル・ファーン (Will Fern) が権力者や為政者に労働者の権利を訴える熱弁のなかに見ることができる。

Give us, in mercy, better homes when we're a lying in our cradles; give us better food when we're a working for our lives; give us kinder laws to bring us back when we're a going wrong; and don't set Jail, Jail, Jail, afore us, everywhere we turn. There an't a condescension you can show the Labourer then, that he won't take, as ready and as grateful as a man can be; for he has a patient, peaceful, willing heart. But you must put rightful spirit in him first; for whether he's a wreck and ruin such as me, or is like one of them that stand here now, his spirit is divided from you at this time. Bring it back, gentlefolks, bring it back! (217)

スレイタが”The key to the solution of this problem, in the view of both Carlyle and Dickens, lay in the spread of mutual understanding and sympathy between the class” (508) と述べているように、「二つの国民」と化した二種の階層の対立を解消するためには、相互的な理解と共感が必要であるという認識の共有を認めることができる。そして、この物語では、この理解と共感の相互性がストーリーの構成に揺るぎなく組み込まれている。つまり、富める者の貧しき者に対する冷淡な態度への批判と貧しき者への教育という、問題解決のための相互的な取り組みを認めることができる。

富める者の態度の問題は、主人公トビー・ヴェックが為政者や権力者と会見した後、彼の耳に響いてくる鐘の音色のなかに端的に表されている。まず、市参事会員のキュート (Alderman Cute)、ファイラー (Filer)、「赤ら顔の紳士」(”the red-faced gentleman”) からの薫陶を授かった後は、次のように響いてくる。”Put ‘em down, Put ‘em down, Good old Times, Good old times, Facts and Figures, Facts and Figures”! (174) そして、国会議員のサー・ジョセフ・ボウリー (Sir Joseph Bowley) との会見後は、”Friends and Fathers, Friends and Fathers” (187) と聞こえている。これら四種の言葉は、それぞれ四人がそれぞれ信奉する観念を表している。市参

事会員兼治安判事キュートは、自殺禁止令を布告したことで有名なサー・ピーター・ローリ (Sir Peter Laurie) をモデルとして描かれた人物と言われているが、彼を象徴する”Put ‘em down”には、貧困者を弾圧する様々な禁止令を布告する様が示唆されていると言えよう。さらに、彼は貧しい者の結婚に反対する態度を明らかにしているが、その背景としてマルサスの『人口論』を読み取ることは容易であろう。「赤ら顔の紳士」の”Good old Times”は、カーライル、ディケンズ共に嫌悪するディレタントイズム (“dilettantism”) を表象する。スレイタによれば、ディレタントイズムはピュージー主義 (“Puseyism”) と関連し、古き良き時代、特に中世に対するピクチャレスクな態度をその最も大きな特徴とするものである。(512) 現在に背を向け、ただ過去を指向し、安逸を貪る有閑階級を象徴しているのである。”Facts and Figures”は、数字を駆使してトビー・ヴェックを困惑させる「統計学」の信奉者ファイラーを端的に表している。キュートと共に、功利主義者 (“unitarianist”) を具現する人物として描かれている。最後に、労働者の”Friends and Fathers”であることを公言するボウリーは、その実、あらゆる人間関係を金銭的な繋がり置き換え、労働者を苦しめる資本主義者に他ならない。この古きパターンリズムの仮面を被った、新しき功利主義者という奇怪な怪物ボウリーの姿は、上記の三人全てが彼のなかに集約されているかのようであり、ディケンズの富める者への批判の中心に位置していると言える。さてここで留意すべきは、戯画化された彼らの姿を通して上層階級への揶揄、攻撃が繰り広げられていることだけでなく、彼らの主義主張がトビー・ヴェックに及ぼす影響において見られる労働者側の問題である。

トビー・ヴェックの問題は、ボウリー等の言葉を未消化のまま鵜呑みにし、”There is no good in us. We are born bad”. (169) と為政者側の労働者観を簡単に信じ込んでしまう点にある。ここに、同じ改心の物語である『鐘の音』と『クリスマス・キャロル』の相違点を認めることができる。つまり、富める者の意識を変えれば、それで問題が全て解決されるのではなく、貧しき者の意識をも変革しなければならないのである。しかし、『クリスマス・キャロル』においても、この貧しき者の問題は示唆されている。現在の幽霊がスクルージの目の前に二人の子供を差し出す場面がある。

They were a boy and girl. Yellow, meagre, ragged, scowling, wolfish; but prostrate, too, in their humility. Where graceful youth should have filled their features out, and touched them with its freshest tints, a stale and shrivelled hand, like that of age, had pinched, and twisted them, and pulled them into shreds. Where angels might have sat enthroned, devils lurked....

“Spirit! are they yours?” Scrooge could say no more.

“They are Man’s,” said the Spirit, looking down upon them. “And they cling to me,

appealing from their fathers. This boy is Ignorance. This girl is Want. Beware them both, and all of their degree, but most of all beware this boy, for on his brow I see that written which is Doom, unless the writing be erased....” (108)

明らかに、この「無知」という名の男の子と「欠乏」という名の女の子は労働者階級の悲惨な状況を象徴している。そして、「無知」という名の男の子に特に注意が必要だという言葉は、当時の労働者問題の共通認識であり、この「無知」こそが労働者の墮落、犯罪の最大の原因であると見なされていた。『鐘の音』においては、この労働者の教育という問題に十全に取り組み、その中心テーマとして設定されているのである。故に、トビー・ヴェックが鐘の精によって誘われた夢の世界（つまり、貧しき者の無知が改善されていない状況で、そうならざるを得ない将来の姿）の中で、トビーの近親者達の墮落、犯罪が描かれるのである。ファーンの姪リリアン（Lilian）は”fallen woman”の道を辿り、ファーンは絶望のなか、放火の罪を犯し、そしてトビーの娘メグ（Meg）は貧窮の末、子供を連れて自殺を図ろうとする。この悲劇的な結末、そして、それに至った経緯を夢という形で体験した後、トビー・ヴェックは夢から、そして自らの蒙から覚醒する。

I know that our Inheritance is held in store for us by Time. I know there is a Sea of Time to rise one day, before which all who wrong us or oppress us will be swept away like leaves. I see it, on the flow! I know that we must trust and hope, and neither doubt ourselves, nor doubt the Good in one another. I have learnt it from the creature dearest to my heart. I clasp her in my arms again. Oh Spirits, merciful and good, I take your lesson to my breast along with her! Oh Spirits, merciful and good, I am graceful! (240)

すなわち、貧しき者への教育は、鐘の精というファンタジーの装置によって行われているのである。このファンタジー装置のリアリズムとの関連性は、明らかに単なる悲劇性を和らげるためのものだけでない。このファンタジー装置のなかに、近代社会によって生み出された新しい知の様相をみることができるのである。

ロジャー・L・ター（Roger L. Tarr）は、スレイタと同様に、『鐘の音』におけるカーライルの影響を指摘するが、特にカーライルの『過去と現在』（*Past and Present*, 1843）に見られる「正義の隠喩」（”Justice Metaphor”）が『鐘の音』のなかに借用されていることを主張している。この「正義の隠喩」は次のように説明されている。”In establishing the metaphorical structure of Book I of *Past and Present*, Carlyle juxtaposes “heavenly justice” and “earthly Justice,” calling the former “eternal inner Facts” and the latter “transient outer Appearances,” which

he refers to as the “Evil Thing,” or Injustice.” (210) すなわち、永遠の内なる真実を表す「天の正義」と移ろい易い外面、言い換えれば不正義を意味する「地の正義」という隠喩による構造化である。勿論、『鐘の音』においては、ボウリー等功利主義者達の説く正義が「地の正義」に相当し、鐘の精の教えが「天の正義」を意味する。(211) その意味では、教会の高い尖塔の鐘楼に現れる鐘の精という設定は、この「天の正義」という隠喩に相応しいものだと言えるだろう。”High up in the steeple of an old church, far above the light and murmur of the town and far below the flying clouds that shadow it, is the wild and dreary place at night: and high up in the steeple of an old church, dwelt the Chimes I tell of.” (151) ここには、明らかに神の視座の暗示があり、人間世界を見下ろす俯瞰の視点が伴われている。しかし、このファンタジー装置の俯瞰の視点に関しては、カーライルのメタファーに触発された結果というよりは、『クリスマス・キャロル』のファンタジー装置、つまり三人の幽霊に付与されている俯瞰性を継承したものだと考えられる。

三人の幽霊のなかで特に現在の幽霊において、その俯瞰性は顕著である。彼はスクルージを抱えて飛び上がり、都市、荒野、海、岩山、灯台を眼下に見下ろし飛翔してみせる。ここには、“panoramic overview”というモチーフとの関連を見ることができる。つまり、当時の大衆娯楽形態の一つ、「パノラマ」との類縁性を認めることができる。ジョナサン・アラク (Jonathan Arac) は、バーカー (Barker) の発明によって大流行となった「パノラマ」という見世物興行が、19 世紀の小説に見られる俯瞰の視点に影響を与えたことを指摘している。(18) しかし、より直接的な影響として、18 世紀フランスの小説家ル・サージュ (Le Sage) の『跛の悪魔』(*Diabole Boiteux*, 1707) に登場する悪魔アスモデの不可思議な能力「屋根剥がし」を挙げることができる。「屋根剥がし」とは、アスモデが主人公を連れて自由に空を飛び、家々の屋根を剥がして、中の様子を映し出すというものである。しかし、過去の幽霊にはこのような覗き見の様相はなく、スクルージの教育という大義名分のなかで、「屋根剥がし」を行う。つまり、“evil spirit”を“good spirit”に変えたことがディケンズの意匠であり、「天の正義」との類縁性を見ることができよう。アラクは、ディケンズも含む 19 世紀の小説家にこのような強力な観察の装置を希求させた動因を次のように説明している。”The major mid-nineteenth-century writers...participated in one of the great enterprises of their age, the production of knowledge from the observation of disorder and disruption, thereby transforming that disorder into the basis for a newly conceived order.” (17) つまり、ディケンズは、カーライル等と共に、無秩序の秩序化という社会的欲望のなかに取り込まれていたと言えるかもしれない。そして、このとき、強力な観察装置にもう一つのアナロジーを重ね合わせることができる。それは、ジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham) が新しい監獄として考案した「一望監視施設」(“Panopticon”) である。パノプティコンとは、中央の塔と円環状の建物からなる監獄で、塔に配置された監視者、看守は、自分の姿

は見られることなく、円環状の建物に居る囚人を一望のもとに監視できるというものである。ミシェル・フーコー (Michel Foucault) は、パノプティコンを近代の知と結びつけた権力構造のあり方を最も良く象徴するものとして見なしている。前近代的社会においては、超権力者 (国王の身体) が存在したが、近代社会においては、超権力者の姿はなく、権力は目に見えないものとなる。つまり、混沌たる社会に安定した秩序を与えるべく、より効率的な不可視の権力が必要とされるのである。それは、「訓育的権力」として、徹底的な監視機能を社会のなかに浸透させ、延いては、社会の成員全てを匿名の監視者、かつ被監視者にするというものである。(195-228) すなわち、このように秩序化された監視社会を象徴するパノプティコンのイメージにおいて、19世紀の作家達が取り付かれた強力な観察装置の様態を見ることは容易であろう。

その意味で、『鐘の音』の鐘の精が、顔を見せることなく強力な眼差しをもつ恐るべき姿として描かれていることは留意されるべきであろう。

Mysterious and awful figures! Resting on nothing; poised in the night air of the tower, with their draped and hooded heads merged in the dim roof; motionless and shadowy. Shadowy and dark, although he saw them by some light belonging to themselves—none else was there—each with its muffled hand upon its goblin mouth.

He could not plunge down wildly through the opening in the floor, for all power of motion had deserted him. Otherwise he would have done so—aye, would have thrown himself, head-foremost, from the steeple-top, rather than have seen them watching him with eyes that would have waked and watched although the pupils had been taken out.

(203)

頭巾をすっぽり被り、暗闇の中、影のように佇み、ひたすら凝視し続ける恐ろしき精霊達において、見られずして見る行為、“unseen observation”という監視装置の役割を見ることができる。そして、トビー・ヴェックの眼前に映し出される、貧しき者の姿、悲惨な生活、そしてその窮状が生み出す墮落、犯罪、このような場面の呈示には、トビーという労働者を教育しようとする試みだけでなく、同時に、監視と統括の眼差し、労働者の無秩序を改善し秩序化しようとする意志が内包されている。パノプティコン等の近代型監獄は、従来の監獄に見られたような処罰のための場だけではなく、監視と管理を前提とした犯罪者を矯正する場となったと言われているが、近代社会の権力も、監視システムと教育システムという基盤の上に成り立っていると言えよう。労働者階級の教育を叫ぶ声の中には、犯罪者予備軍であるこの階層を監視し、統括する意志がすでに組み込まれている。社会は、もはや穏やかな監獄そのものであり、トビー等労働者達はその直中に位置付けられようとしているのである。トビー・ヴェックは、不可思議な体験を通して、そ

の穏やかなる監獄の心髄に触れたのである。

以上見てきたように、『鐘の音』における「天の正義」とは、悲劇を和らげる非現実なファンタジー装置というよりはむしろ、近代社会の新しい権力装置を寓意的に具現化したもののように思われる。この物語のリアリズムとファンタジーは、相容れない二種の要素ではなく、密接な関係のなかに捉えることができる。この物語のファンタジーが、蓋然的な労働者達の悲惨な将来の様相を映し出しているように、このファンタジー装置を権力装置と読み替えれば、別の意味での蓋然的な将来の様相、つまり穏やかな監獄と化した社会を映し出しているのではないか。もしそうなら、この物語の最後、語り手の、”oh Listener, dear to him in all his visions, try to bear in mind the stern realities from which these shadows come” (245) という言葉が、本来とは別の意味として響いてくるように思われる。何故なら、この物語中、鐘の精達は、しばしば、”shadows” (e.g. 238) と呼ばれているからである。

引用文献

- Arac, Jonathan. *Commissioned Spirits: The Shaping of Social Motion in Dickens, Carlyle, Melville, and Hawthorne*. New Brunswick: Rutgers Univ. P., 1979.
- Dickens, Charles. *Bleak House*. Ed. Norman Page. London: Penguin Books, 1971.
- . “The Chimes.” *The Christmas Books*. Ed. Michael Slater. Vol. 1. London: Penguin Books, 1971.
- . “A Christmas Carol.” *The Christmas Books*. Ed. Michael Slater. Vol. 1. London: Penguin Books, 1971.
- . *Household Words*. Vol. 1. London, 1850.
- . *The Pickwick Papers*. Ed. Robert L. Patten. London: Penguin Books, 1972.
- Foucault, Michel. *Discipline and Punish: the Birth of the Prison*. Trans. A. Sheridan. New York: Vintage Books, 1979.
- Goldberg, Michael. *Carlyle and Dickens*. Athens: Univ. of Georgia P., 1972.
- Kurata, Marilyn J. “Fantasy and Realism: A Defense of *The Chimes*.” *Dickens Studies Annual* 13 (1984): 19-34.
- Slater, Michael. “Carlyle and Jerrold into Dickens: A Study of *The Chimes*.” *NCF* 24 (1970): 506-526.
- Tarr, Robert L. “Dickens’ Debt to Carlyle’s “Justice Metaphor” in *The Chimes*.” *NCF* 27 (1972): 208-215.